

## 学級集団内における好ましくない人物に対する感情の検討 : 黒い羊効果の観点から

|          |  |
|----------|--|
| 著者       | 長峯 聖人, 外山 美樹   |
| 著者別名     | Nagamine Masato, Toyama Miki   |
| 雑誌名      | 筑波大学心理学研究  |
| 号        | 52   |
| ページ      | 25-34  |
| 発行年      | 2016-08-25   |
| その他のタイトル | The research of emotions to the unfavorable member in a class : From the viewpoint of the "black sheep effect" |
| URL      | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00144459">http://hdl.handle.net/2241/00144459</a>                          |

## 学級集団内における好ましくない人物に対する感情の検討

——黒い羊効果の観点から——

筑波大学大学院人間総合科学研究科 長峯 聖人

筑波大学人間系 外山 美樹

The research of emotions to the unfavorable member in a class: From the viewpoint of the "black sheep effect"

Masato Nagamine (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Miki Toyama (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The research of emotions to the unfavorable member in a class: From the viewpoint of "black sheep effect" The purpose of this study was to examine the side of emotion on black sheep effect in a class. In this study, we developed the scale of emotion toward unfavorable member in a class, and investigated association between the scale and social comparison orientation or group identification or self-esteem. 15 junior high school students participated in our pilot study, and we developed a prototype the scale. Next, 559 junior high school students participated in our main study. Factor analysis indicated that the scale of emotion toward unfavorable member in a class involved three factors: "empathy", "hostility-anger", "depression-dejection caused by others". A correlation analysis with other external variables and internal consistency indicated that this scale has the reliability and validity. Additionally, hierarchical multiple regression analysis indicated that group identification adjusted the effect of self-esteem on "hostility-anger", and when group identification was low, the low levels of self-esteem tended to the high levels of "hostility-anger" only in women. These results show the type of emotion toward unfavorable member in a class and suggest sex differences exist in those effects.

**Key words:** black sheep effect, unfavorable member, emotion, class

児童・生徒において学級集団が果たす役割は大きく、学級集団内での人間関係は非常に重要なものである(狩野・田崎, 1990)。特に中学生では、小学生と比較して友人を相談相手とすることが増え(坂本, 1999)、学校生活の楽しさに級友適応が強い影響を及ぼしている(吉岡, 2001)ことから、その重要性は一層大きいものであると考えられる。学級集団での人間関係は、個人としての私的なものと集団成員としての公的なものに分類され、より重要なのは私的な人間関係であるとされる(狩野・田崎, 1990)。しかし、学級集団を1つの集団とみなし、

その内部における人間関係を同じ集団に属する成員同士のものとして捉える観点は重要であろう。学級集団内での人間関係は単なる個人間の関係によって説明できる側面もあれば、集団としての機能が影響している側面もあると考えられるからである。

学級集団を1つの社会集団として捉えた研究はいくつか存在する。例えば、学級における集団効力感(Bandura, 1986)を取り扱ったものがある。集団効力感とは「直面する問題の解決や、努力を1つにすることを可能にする集団の効力の感覚」である(Bandura, 1995)が、学級集団としての効力感が高

いと学級満足度(淵上・今井・西山・鎌田, 2006)や学校適応感(本郷, 2005)も高いことが示されている。また, 集団効力感以外では, 学級における集団規範が中学生のいじめ加害傾向に影響を及ぼすことが明らかになっている(大西・吉田, 2010)。

学級集団の特徴の1つとして, 個人が集団を離脱しにくい(黒川・古川, 2000)ことが挙げられる。このことは, 集団にうまく適応できなかった場合であっても, 集団に留まり続けなければならないということの意味している。西野(2007)は学級にうまく適応できなかったことで孤立した中学生が感じる疎外感に着目し, 学級における疎外感が情緒的な問題行動を予測する要因となることを示している。西野(2007)は学級集団にうまく適応できなかった個人の問題に焦点を当てて検討しているが, 一方で, そういった異質な個人に対して他の個人が示す排他性に焦点を当てた研究も存在する。例えば, 竹村・高木(1988)は集団から逸脱し, 孤立している人物がいじめの標的になりやすいことを示している。また, 長谷川(2014)は友人への同調欲求が強ければ, 逸脱した成員に対して集団からの排除を認めやすくなることを明らかにしている。竹村・高木(1988)ならびに長谷川(2014)は仲間集団を対象としたものであるが, 児童・生徒において仲間集団の成員が同じ学級にいる割合が高い(有倉・乾, 2007)ことを踏まえると, その結果は学級集団にも適用が可能であると考えられる。

ところで, このような逸脱した成員に対する集団からの排斥を説明する社会的現象に黒い羊効果(Marques, Yzerbyt, & Leyens, 1988)がある。黒い羊効果とは, 内集団の好ましい成員が外集団の好ましい成員より高く評価される一方, 内集団の好ましくない成員が外集団の好ましくない成員より低く評価されるという現象(Marques et al., 1988)である。同じく集団に関する社会的現象に, 内集団に対して好ましい評価・行動を示すという内集団バイアス(Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971)がある。黒い羊効果は, 好ましい成員には内集団バイアスが生じる一方, 好ましくない成員に対しては対極の結果を示すという点で, 内集団バイアスの特殊な形であるとされる(Marques & Yzerbyt, 1988)。つまり, 黒い羊効果において, 内集団の好ましい成員に対する好意的な評価はあくまで内集団バイアスであり, その本質は内集団の好ましくない成員に対する否定的な評価にあると言える。本研究においても, 黒い羊効果の本質的な現象としての, 好ましくない成員に対する否定的な反応について焦点を当てていく。

黒い羊効果は様々な社会集団を対象として検討が

行われており, 学級集団にも適用が可能であると考えられる。しかし, 筆者の知る限り, 学級集団における黒い羊効果を検討した研究は国内外を問わず存在しない。そこで本研究では, 学級集団における黒い羊効果を検討することで, 学級内の好ましくない人物, 逸脱した人物に対する反応を集団という観点から捉えることを目的とする。

しかし, 学級集団における黒い羊効果を検討する上で, 黒い羊効果そのものを厳密に測定することが難しいという問題点がある。黒い羊効果は内集団と外集団, 好ましくない成員と好ましくない成員という2つの軸を設定し, 内集団の好ましい成員は外集団の好ましい成員よりも一層好ましいと評価され, 内集団の好ましくない成員は外集団の好ましくない成員よりも一層好ましくないと評価されるものである。しかし, 他の多くの社会集団とは異なり, 学級集団における内集団と外集団は厳密に区別できるのではない。その理由として, 内集団と外集団がどちらも学校という1つの上位集団に属しており, また内外集団の成員同士でも交流が多いであろうことが挙げられる。内外集団で共通のカテゴリーが存在するか, 内外集団の成員同士で接触がある場合に, 再カテゴリー化が行われることで同じ集団の成員として認知される(池上, 2014)ため, 学級集団においては集団の再カテゴリー化が生じやすい可能性がある。そのため, 内外集団を厳密には線引きできない学級集団において, 黒い羊効果の生起を定義通りに検証することは困難であると考えられる。したがって, 本研究においては好ましさや逸脱の程度の評価という指標は測定せず, 内外集団に好ましくない人物がいる状況において, 同じ学級集団(内集団)の好ましくない人物に対して個人がどのような反応を示すのかを検討することで, 学級集団における黒い羊効果の機能を間接的に検討する。

学級集団内の好ましくない人物に対する反応として, 本研究では感情を取り上げることとする。感情は学校環境への適応に関して重要な役割を担っているとされるが, これまでの研究においては感情の役割が軽視されていたことが指摘されている(大対・大竹・松見, 2007)。大対他(2007)によれば感情過程と認知過程が相互に作用しあって結果的に社会的行動に影響を及ぼしているとされるが, 好ましさの判断を認知過程として捉えるならば, 学級集団内の好ましくない人物に対しては何らかの感情過程が生じていると考えられる。

以上を踏まえて本研究では, 学級集団において黒い羊効果が生じるような状況において, 学級集団内の個人にどのような感情が生じるのかを検討するこ

ととする。検討にあたり、学級集団内の好ましくない人物に対してどのような感情が生じるのかが明らかでないことから、学級集団内の好ましくない人物に対する感情を測定する尺度を作成する。調査対象者は、より同調的な友人関係を形成しやすいという特徴を持つ（石本他, 2009）ことから、中学生とする。

また、本研究では直接黒い羊効果を扱わない関係上、黒い羊効果を予測すると考えられる要因を、学級集団内の好ましくない人物に対する感情とともに検討する。黒い羊効果を予測すると考えられる変数として、今回は社会的比較志向性、集団同一視ならびに自尊感情を取り上げる。

内集団バイアスは集団間の社会的比較であり（高田, 2011）、黒い羊効果が内集団バイアスの特殊な形であることから、社会的比較志向性は黒い羊効果と関連があると考えられる。また、社会的比較志向性は内集団に対する満足度と関連があることが示されており（Buunk, Nauta, & Molleman, 2005）、集団内における成員間の関係について説明する上でも重要な変数であると考えられる。集団同一視は、その程度が高いと黒い羊効果の程度が強いという結果が示されており（Branscombe, Wann, Noel, & Goleman, 1993）、黒い羊効果と密接な関連があると考えられる。さらに、学級集団における排斥に関して集団同一視は重要な意味を持つ（中島・浦・甲斐, 2010）ことから、学級集団における黒い羊効果を説明するためには不可欠な要因である。また、自尊感情は社会的比較においてその根本原理に関わる重要な要因である（高田, 2011）。しかし、これまでの研究において、自尊感情と社会的比較との関連については結果が一貫していない。黒い羊効果は、集団間における社会的比較の特殊な形としても考えることができるため、黒い羊効果と自尊感情は関連があると推測される。しかし、社会的比較と自尊感情の関連が明らかになっていない以上、黒い羊効果における自尊感情の役割について仮説を立てるのは困難である。したがって、黒い羊効果に関連すると考えられる社会的比較志向性、集団同一視の影響を加味し、それぞれと自尊感情との交互作用項が予測変数となるかどうかを検討することとする。

さらに本研究では、中学生における学級集団の階層構造に性差が存在する（藤本, 2011）ことから、学級集団内の好ましくない人物に対する感情においても同様に性差が生じるか検討することとする。

## 予備調査

### 目的

予備調査では、本調査で使用する仮想場面が、中学生が回答する上で適切であるかどうかの検証を行うとともに、学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度を作成するための項目を収集することを目的とした。

### 方法

**調査対象者** 中学1～3年生15名（男子10名、女子5名）を調査対象とした。

**調査時期** 2014年7月。

**手続き** 部活動の空き時間を利用し、半構造化面接を行った。調査を行う前に面接の内容について概要を説明し、その上で面接の実施ならびに面接内容の録音に関して承諾を得てから面接を開始した。

**調査内容** 学級集団内の好ましくない人物に対する感情を検討するにあたり、調査対象者に対して倫理的に配慮する必要があるという観点から、文章とイラストから構成される仮想場面を提示し、その登場人物に生じていると考えられる感情を回答させる形を取ることにした。仮想場面は、事前の調査<sup>1)</sup>で内容的妥当性を確認したものをを用いた。場面は登場人物<sup>2)</sup>の学級と他の学級がクラスマッチ（競技はバスケットボール）で対戦しているという状況の中、登場人物のクラスメイトでありながら自分たちの学級に対して否定的なことを言う人物<sup>3)</sup>がいるというものであった。場面は面接者が文章を声に出して読み上げる形を取り、すべて読み終わった後で「あなたがB君（さん）だとしたら、Cに対してどんなことを感じたりすると思いますか？」と尋ね、できるだけ多く回答するよう求めた。その後、場面の想像しやすさならびに登場人物に対する投影の程度について、“そう思う”、“どちらかといえばそう思う”、“どちらともいえない”、“どちらかといえばそう思わない”、“そう思わない”の5件法で尋ねた。

1) 心理学を専攻する大学院生15名を対象とし、作成した仮想場面の内容的妥当性を質問紙調査によって検証した。手続きとして、文章とイラストによる仮想場面を提示し、それぞれに対して、黒い羊効果が適切に表現されていると思うかを“そう思う”から“そう思わない”の5件法で尋ねた。

2) 場面中ではB君（さん）として表記した。調査対象者が投影する対象として設定され、調査対象者の性別と一致するように配慮した。

3) 場面中ではCと表記した。この人物に関しては、特定の性別を想起させるような記述を行わなかった。

最後に、調査対象者において調査に対する疑問や質問がないことを確認した上で面接を終了した。

**結果** 場面の想像しやすさならびに登場人物に対する投影の程度について、回答が“どちらともいえない”であるダミー変数を用意し、Wilcoxonの順位付符号検定を行った。分析の結果、いずれにおいてもダミー変数より有意に得点が高いことが示され、作成した仮想場面が、中学生が回答する上で妥当であることが確認された。さらに、面接調査により得られた、登場人物が感じた内容の項目についてKJ法を援用して整理したところ、95項目が得られた。それらの項目を分類するカテゴリーについて何度か検討を行った結果、最終的に3つのカテゴリーに分類することが最適であると判断した。第1カテゴリーは“敵意・怒り”（項目例：むかつく）、第2カテゴリーは“他者に起因する抑うつ・落ち込み”（項目例：こんなやつだとは思わなかった）、第3カテゴリーは“共感”（項目例：悪い奴じゃない）であった。これらのカテゴリーごとに6項目ずつ作成し、全18項目を学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度とした。

## 本調査

### 目的

本調査では、予備調査で作成した学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度を用い、学級集団内の好ましくない人物に対する感情が黒い羊効果と関連があると考えられる社会的比較志向性、集団同一視、自尊感情によって説明されるかを検討することを目的とした。

### 方法

**調査対象者** 茨城県内にある中学校2校の1・2年生374名（男子189名、女子182名、性別不明3名）と静岡県内にある中学校1校の1・2年生185名（男子99名、女子83名、性別不明3名）の計559名（男子288名、女子265名、性別不明6名）を調査対象者とした。

**調査時期** 2014年10月～2015年2月。

**手続き** ホームルームや授業時間の一部を利用して、学級ごとに質問紙調査用紙を配布した。

**倫理的配慮** 質問紙調査を実施する際、実施の前に、回答内容と学校での成績には一切関係がないこと、回答内容が他の人に知られる心配はないこと、答えたくない質問を飛ばしたり、途中で回答をやめたりしても構わないことを質問紙の表紙に明記した上で、調査を実施する教師にその旨を口頭で説明す

るよう依頼した。また、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会で承認を得てから行われた。

**調査内容** まず、予備調査で使用した場面から登場人物の内面や言動の描写（“Bくんは自分のクラスに絶対勝ってほしいと考え、声を出して応援しました”など）を削除したものを提示し、学級集団内の好ましくない人物として設定したターゲット（C）に対する感情に関する項目に回答するよう求めた。項目は、予備調査で作成した学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度全18項目を用いた。すべての項目について、“そう思う”、“ややそう思う”、“どちらともいえない”、“あまりそう思わない”、“そう思わない”の5件法で回答を求めた。その後、“自分にとってスポーツ/バスケットボールは重要である”という2つの項目にどの程度当てはまるかを、“非常にそう思う”、“そう思う”、“どちらともいえない”、“そう思わない”、“全くそう思わない”の5件法で回答するよう求めた。その後、関連変数としての尺度について回答を求めた。使用した尺度は以下の通りである。

(a) 社会的比較志向性尺度：外山（2002）の尺度のうち、能力比較下位尺度7項目について5件法で尋ねた（項目例：自分の親しい人の状況と、他の人の状況をよく比べる）。

(b) 集団同一視尺度：Karasawa（1991）の尺度を、中学生が理解できるように項目の表記を一部改めて使用した。また、元の尺度はSD法であるが、本研究においては中学生が回答しやすいように、リッカート法に変更した。短縮版全7項目について、“非常にあてはまる”、“ややあてはまる”、“どちらともいえない”、“あまりあてはまらない”、“全くあてはまらない”の5件法で回答を求めた（項目例：●組に親しみを感じている<sup>4)</sup>）。

(c) 自尊感情尺度：桜井（2000）の尺度全10項目について、4件法で回答を求めた（項目例：私は自分に満足している）。

## 結果

### 学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度の因子構造

学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度全18項目の偏向状況を確認した結果、否定的回答（評定値が1、2）および肯定的回答（評定値が4、5）のどちらかに全回答の70%以上が偏って回答し

4) 教示文において、“●組”に自分の学級をあてはめて回答するよう求めた。

ていた項目はなかった。そこで18項目に対して最尤法による因子分析を行った。その結果、スクリー基準ならびに因子の解釈可能性から3因子解が妥当であると判断した。そこで3因子を仮定して最尤法、Promax 回転による因子分析を行った。分析の結果、同じ下位尺度として想定した他の項目と異なったパターンを示した項目が2つ見られた。項目内容を検討した結果、それらと、同じ因子に負荷量が高い他の項目を合わせて1つの尺度としてみなすことは内容的に妥当でないと判断し、2項目とも削除した。また、複数の因子に負荷量が高かった1項目も削除した。残った15項目について再度、最尤法、Promax 回転による因子分析を行った。その結果、いずれの因子にも.40以上の負荷量を示さない項目が1つ見られたため、それを削除した。残った14項目について再度、最尤法、Promax 回転による因子分析を行ったところ、すべての項目がいずれか1つの因子にのみ.40以上の負荷量を示していたため、分析を終了した。最終的な因子パターンと項目平均ならびに標準偏差を Table 1 に示した。

第1因子は“Cを信じてあげたい”、“Cを責めるのはよくない”などの項目が高い負荷量を示していたため、“共感”と命名した。第2因子は“むかつ

く”、“いらいらする”などの項目が高い負荷量を示していたため、“敵意・怒り”と命名した。第3因子は“悲しい”、“Cにがっかりする”などの項目が高い負荷量を示していたため、“他者に起因する抑うつ・落ち込み”と命名した。

因子分析の結果に基づき、各因子に高い負荷量を示した項目 (Table 1の太字で示した項目) で下位尺度を構成した。各下位尺度の内的一貫性を検討するために Cronbach の $\alpha$ 係数を算出したところ、“共感”で.77、“敵意・怒り”で.84、“他者に起因する抑うつ・落ち込み”で.74と概ね満足できる値が確認された。各下位尺度の平均および標準偏差を Table 2 に示した。

#### 学級集団内の好ましくない人物に対する感情における性差

学級集団内の好ましくない人物に対する感情において、男女で差が見られるのかどうかを検討するため、 $t$ 検定を行った。結果を Table 3 に示す。“他者に起因する抑うつ・落ち込み”において女子 ( $M=14.61$ ,  $SD=3.66$ ) が男子 ( $M=13.40$ ,  $SD=3.71$ ) より得点が高かった ( $t(542)=3.84$ ,  $p<.001$ ,  $d=0.33$ )。“共感”、“敵意・怒り”においては男女で有意な差が見られなかった (順に,  $t(536)=1.59$ ,  $n.s.$ 。

Table 1  
学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度の因子分析結果

| 項目                                    | <i>M</i> | <i>SD</i> | F1         | F2         | F3         | <i>h</i> <sup>2</sup> |
|---------------------------------------|----------|-----------|------------|------------|------------|-----------------------|
| 第1因子 共感 ( $\alpha=.77$ )              |          |           |            |            |            |                       |
| Cを信じてあげたい                             | 2.97     | 1.16      | <b>.81</b> | .08        | -.05       | .59                   |
| Cを責めるのはよくない                           | 3.08     | 1.20      | <b>.78</b> | .01        | -.08       | .60                   |
| Cは悪い人ではない                             | 3.09     | 1.17      | <b>.64</b> | -.08       | .03        | .47                   |
| Cは、本当はそんなことを思っていない                    | 2.90     | 1.14      | <b>.56</b> | -.07       | .04        | .36                   |
| Cがそういう発言をするのには何か理由があるのだろうか            | 3.66     | 1.24      | <b>.42</b> | -.09       | .28        | .29                   |
| Cのような見方もあるかもしれない                      | 2.98     | 1.20      | <b>.41</b> | .05        | -.12       | .16                   |
| 第2因子 敵意・怒り ( $\alpha=.84$ )           |          |           |            |            |            |                       |
| むかつく                                  | 3.28     | 1.28      | .10        | <b>.98</b> | .01        | .87                   |
| いらいらする                                | 3.44     | 1.23      | .01        | <b>.78</b> | .16        | .73                   |
| Cに、同じクラスにいてはしくない                      | 2.79     | 1.26      | -.16       | <b>.60</b> | -.04       | .48                   |
| Cをうっとうしく感じる                           | 3.03     | 1.16      | -.18       | <b>.42</b> | .05        | .32                   |
| 第3因子 他者に起因する抑うつ・落ち込み ( $\alpha=.74$ ) |          |           |            |            |            |                       |
| 悲しい                                   | 3.59     | 1.29      | .04        | -.19       | <b>.91</b> | .72                   |
| 残念に思う                                 | 3.52     | 1.24      | -.03       | .20        | <b>.59</b> | .50                   |
| やる気がなくなる                              | 3.37     | 1.28      | .01        | .21        | <b>.50</b> | .39                   |
| Cにがっかりする                              | 3.47     | 1.20      | -.08       | .19        | <b>.43</b> | .32                   |
| 因子間相関                                 |          |           |            |            |            |                       |
|                                       |          |           | F2         | -.58       |            |                       |
|                                       |          |           | F3         | .00        | .42        |                       |

(注) Cは、場面における学級集団内の好ましくない人物を指す。

Table 2  
学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度および外的変数の記述統計量と相関係数

|                  | 項目数 | 得点範囲 | M     | SD   | 相関係数    |        |        |        |        |
|------------------|-----|------|-------|------|---------|--------|--------|--------|--------|
|                  |     |      |       |      | ①       | ②      | ③      | ④      | ⑤      |
| 共感               | 6   | 6~30 | 18.63 | 4.84 | -.51*** | -.08†  | .02    | .22*** | .10*   |
| 敵意・怒り①           | 4   | 4~20 | 12.56 | 4.03 |         | .49*** | .18*** | .09*   | -.08   |
| 他者に起因する抑うつ・落ち込み② | 4   | 4~20 | 13.96 | 3.74 |         |        | .18*** | .28*** | .05    |
| 社会的比較志向性③        | 7   | 7~35 | 22.23 | 4.91 |         |        |        | .19*** | -.02   |
| 集団同一視④           | 7   | 7~35 | 23.19 | 5.11 |         |        |        |        | .33*** |
| 自尊感情⑤            | 9   | 9~36 | 23.30 | 5.30 |         |        |        |        |        |

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$

Table 3  
学級集団内の好ましくない人物に対する感情の性差

|                 | 集団 | n   | M     | SD   | t値      |
|-----------------|----|-----|-------|------|---------|
| 共感              | 男  | 280 | 18.34 | 4.82 | 1.59    |
|                 | 女  | 258 | 19.00 | 4.84 |         |
| 敵意・怒り           | 男  | 282 | 12.60 | 4.08 | 0.28    |
|                 | 女  | 261 | 12.50 | 3.96 |         |
| 他者に起因する抑うつ・落ち込み | 男  | 282 | 13.40 | 3.71 | 3.84*** |
|                 | 女  | 262 | 14.61 | 3.66 |         |

\*\*\* $p < .001$

$d = 0.14$ ;  $t(541) = 0.28$ , *n.s.*,  $d = 0.02$ 。

#### 学級集団内の好ましくない人物に対する感情を予測する要因の検討

社会的比較志向性、集団同一視、自尊感情<sup>5)</sup>、社会的比較志向性と自尊感情の交互作用ならびに集団同一視と自尊感情の交互作用<sup>6)</sup>、学級集団内の好ましくない人物に対する感情の予測要因となり得るのかを検討するため、学級集団内の好ましくない人物に対する感情の各下位尺度を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。学級集団内の好ましくない人物に対する感情と各変数との相関係数はTable 2に示した。まず第1ステップでバスケットボールの重要性を共変量として投入した<sup>6)</sup>。続いて、第2ス

テップで社会的比較志向性、集団同一視、自尊感情を投入した。最後に、第3ステップで社会的比較志向性と自尊感情の交互作用項ならびに集団同一視と自尊感情の交互作用項を投入した。各変数の値と交互作用項の多重共線性を回避するために、社会的比較志向性、集団同一視、自尊感情の測定値を各平均値との偏差に変換し、その変換値を回帰モデルに投入した。分析にあたって、男女によって結果に違いが見られる可能性を踏まえ男女別に検討を行った。

まず、“共感”を従属変数として分析を行った。男子は、第2ステップが有意傾向であり( $\Delta R^2 = .05$ ,  $F(3,225) = 2.48$ ,  $p < .10$ )、集団同一視の標準回帰係数が有意であった( $\beta = .20$ ,  $p < .05$ )。女子は、第1、第2ステップが有意であり(順に $R^2 = .05$ ,  $F(1,232) = 11.05$ ,  $p < .01$ ;  $\Delta R^2 = .05$ ,  $F(3,229) = 3.76$ ,  $p < .05$ )、第1ステップではバスケットボールの重要性の標準偏回帰係数( $\beta = .23$ ,  $p < .01$ )が、第2ステップでは集団同一視の標準偏回帰係数

5) 自尊感情尺度は全10項目であったが、項目8“もう少し自分を尊敬できたらと思う”が自尊感情尺度全体の $\alpha$ 係数を著しく低下させていたためこれを削除し、残りの9項目を自尊感情として扱った。

6) 本研究で用いた場面がバスケットボールを題材にしたものであり、バスケットボールの重要性を統制する必要があると考えたためである。同様にスポーツの重要性についても統制が必要であると考えたが、肯定的回答(4, 5)に70%以上分布している一方で否定

的回答(1, 2)に10%以下しか分布しておらず、中学生全体の傾向としてスポーツの重要性が高いと考えられたため統制変数からは除外した。

( $\beta = .22, p < .01$ ) が有意であった。第3ステップは男女ともに有意とはならなかった。

続いて、“敵意・怒り”を従属変数として分析を行った。男子は、いずれのステップも有意ではなかった。女子は、第1ステップは有意ではなかったが、第2ステップが有意 ( $\Delta R^2 = .09, F(3, 229) = 7.39, p < .001$ )、第3ステップは有意ではなかったが、小さな効果量が認められた ( $\Delta R^2 = .03, F(2, 227) = 2.40, p = .10$ )。第2ステップでは社会的比較志向性の標準偏回帰係数が有意であり ( $\beta = .25, p < .01$ )、第3ステップでは集団同一視と自尊感情  $m$  の交互作用項の標準偏回帰係数が有意であった ( $\beta = .17, p < .05$ )。女子の第3ステップにおける有意な交互作用の内容を検討するために、集団同一視ならびに自尊感情の得点に各平均値  $\pm 1SD$  の値を代入し、単純傾斜分析を行った。結果を Figure 1 に示す。分析の結果、集団同一視が高い場合には、自尊感情は“敵意・怒り”に影響を及ぼさない ( $b = 0.03, \beta = .05, p = .66$ ) が、集団同一視が低い場合には、自尊感情が“敵意・怒り”に影響を及ぼしており ( $b = -0.18, \beta = -.24, p < .05$ )、自尊感情が低いほど“敵意・怒り”の得点が高かった。

最後に、“他者に起因する抑うつ・落ち込み”を従属変数として分析を行った。男子、女子ともに第2ステップのみ有意であった ( $\Delta R^2 = .11, F(3, 225) = 7.70, p < .001; \Delta R^2 = .11, F(3, 229) = 5.56, p < .01$ )。男子は、社会的比較志向性と集団同一視の標準偏回帰係数が有意であった (順に、 $\beta = .19,$

$p < .05; \beta = .21, p < .05$ )。女子は、集団同一視の標準偏回帰係数が有意であった ( $\beta = .28, p < .001$ )。

## 考 察

本研究の目的は、学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度を作成し、作成した尺度と関連変数との検討を通じて学級集団における黒い羊効果を間接的に検討することであった。

### 学級集団内の好ましくない人物に対する感情の構造

学級集団内の好ましくない人物に対する感情尺度について因子分析を行った結果、3つの因子が抽出された。一部の項目が削除されたものの、これは予備調査の段階で想定していた下位カテゴリーの構造と一致しており、作成した尺度の因子的妥当性が得られたと言える。また、各因子に負荷量が高かった項目で下位尺度を設定したところ、概ね満足できる内的一貫性が確認された。

下位尺度間の相関を見てみると、まず“共感”は“敵意・怒り”と中程度の負の相関が見られた。これは、他者への寛容さが怒りと負の相関を示すという石川・濱口 (2007) の結果と一致している。また、“敵意・怒り”は“他者に起因する抑うつ・落ち込み”と中程度の正の相関を示していた。これは、他者から期待に反する言動を受けた場合に怒りと抑うつが併存的に喚起されやすい (遠藤・湯川, 2013) という結果を支持する結果となっている。

さらに、“共感”は“他者に起因する抑うつ・落

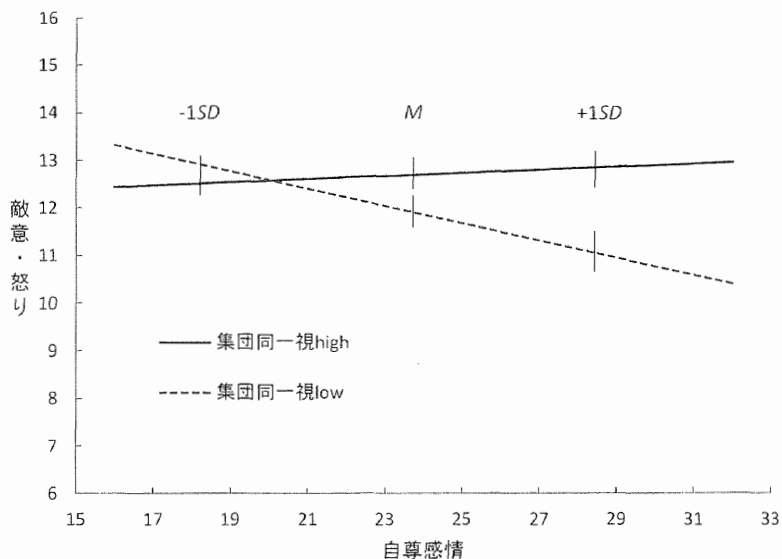


Figure 1. 女子における“敵意・怒り”に自尊感情と集団同一視 (high or low) が及ぼす影響。  
注) high と low はそれぞれ、+1SD 以上、-1SD 以下を示す。



ち込み”と無相関であった。他者への寛容さが抑うつと弱い負の相関を示すことが明らかになっており(石川・濱口, 2007), 本研究とは異なった結果である。しかし, “他者に起因する抑うつ・落ち込み”は他者への失望を内包していることから, 従来の抑うつ感情とは異なった構造をしており, それがこのような結果の違いにつながった可能性がある。

#### 学級集団内の好ましくない人物に対する感情における性差

性差の検討を行った結果, “他者に起因する抑うつ・落ち込み”のみに性差が見られ, 女子の得点が男子の得点よりも高かった。

“他者に起因する抑うつ・落ち込み”は同じ集団の成員としての期待に反する行動をされたことによって生じる抑うつ感情や落胆感情であると考えられる。櫻本(2000)によると, 女子は男子に比べて友人に求める欲求の程度が強く, 共有や強調をより重視しているとされる。これを踏まえると, 女子は学級内の成員に対しても友人と同様に強い欲求を持っており, そのことによって期待に反する行動をされた結果として“他者に起因する抑うつ・落ち込み”が強く生じたのだと考えられる。

“共感”ならびに“敵意・怒り”については性差が見られなかった。このことは, 怒りと関連があるとされる攻撃性において男子の程度が女子よりも強く, 共感的な感情反応において女子の程度が男子よりも強い(櫻井他, 2011)という結果に一致していない。このことから, 女子が男子よりも共有や協調をより重視していることにより, 社会的アイデンティティが顕在化している場合には男子と同程度に怒りの程度が強まり, 共感の程度が弱まるのかもしれない。

#### 学級集団内の好ましくない人物に対する感情を予測する要因の検討

本研究の結果から, 学級集団内の好ましくない人物に対する感情を予測する要因として, それぞれの感情ごと, 性別ごとに異なる変数が関連していることが明らかになった。

まず, “共感”では, 男子, 女子ともに集団同一視が予測変数となることが示された。集団同一視は内集団バイアスを予測する要因であるとされる(Karasawa, 1991)。“共感”は好ましくない人物を肯定的に捉えようとするものであり, 内集団バイアスの内容と類似していると考えられる。したがって, 集団同一視が“共感”の予測要因となりうるという結果は, 学級を内集団とした場合においても内集団バイアスが生じるということを示唆していると言えよう。このことから, 学級において例え対象が

好ましくない人物であったとしても, 黒い羊効果必ず生じるというわけではないことが考えられる。

“他者に起因する抑うつ・落ち込み”では男子, 女子ともに集団同一視が予測変数となることが示された。“他者に起因する抑うつ・落ち込み”は同じ内集団の成員としての期待に反する抑うつ感情や落胆感情であると考えられる。集団同一視の程度が強ければそれが生じる程度が強く, そこに性差がないことが示された。さらに男子では, 社会的比較志向性も予測変数となっていた。中学生においては, 女子が男子よりも同調欲求の程度が強いことが示されており(櫻本, 2000), 女子は他者との関わりを個人間としてよりは同じ仲間集団のものとして捉えている可能性がある。このことにより, 自己と他者の個人的な比較を予測する要因である社会的比較志向性は男子のみで有意な予測変数となっている可能性が考えられる。

最後に, “敵意・怒り”では女子で社会的比較志向性ならびに集団同一視と自尊感情の交互作用項が予測変数となっていたが, 男子ではいずれの変数も有意ではなかった。男子において怒りに関連があると考えられる攻撃性が女子よりも高い(櫻井他, 2011)ことを踏まえると, 男子においては今回独立変数として使用した変数よりも, 攻撃性によって“敵意・怒り”が説明される可能性がある。

一方で, 女子においては“敵意・怒り”に対して多様な変数が予測変数となっていた。このことは, 女子は学級内の好ましくない人物に対して怒りや敵意を抱く際, 複雑な認知的プロセスが存在していることを示唆している。特に, 集団同一視と自尊感情の交互作用項が有意であり, 自尊感情が“敵意・怒り”に影響を及ぼす際に集団同一視が調整変数となっていることが示された。中学生女子において, 怒りは自尊感情と負の相関が見られることが明らかになっている(杉浦・田中・山田, 2007)が, 集団同一視の程度が高い場合においては自尊感情が高い場合であっても“敵意・怒り”が生じる程度が強いことが示された。攻撃性は男子の方が高いとされるが, 関係性攻撃は女子の方が行いやすいとされている(濱口・石川・三重野, 2009)。本研究では攻撃性や攻撃行動に関する尺度を使用していないため推測の域を出ないが, 女子が学級内にいる好ましくない人物へ関係性攻撃を行う程度は, 個人間の問題だけでなく, 集団同一視という学級集団レベルの問題が背景に存在する可能性がある。今後は, 実際に学級集団内の好ましくない人物に対してどのような対処行動を取るのか, 更なる検討の必要がある。

### 本研究における課題とまとめ

本研究において今後改善を要する重要な課題が3つ明らかになった。まず1つは、仮想場面における好ましくない人物の設定である。本研究では学級集団内の好ましくない人物として内集団に対して否定的な発言をする者という設定を行った。事前の調査においてこの人物が好ましくない人物であるという設定の妥当性は検証しているが、実際には対象の好ましくない側面を極めて狭い範囲でしか描写できていない。しかし、特に集団単位での行動が多い学級においては多様な好ましくない程度や側面が存在すると考えられ、本研究とは異なる好ましくない程度や側面についても言及する必要がある。

2つ目として、場面の特殊性も課題である。本研究においては、内外の学級集団を比較する状況としてクラスマッチを題材とした仮想場面を使用した。それゆえ、本研究の結果はスポーツ、あるいは競争という要素が絡んでおり、学級集団としてのすべての集団間比較に適用できるものではない。本研究で用いた場面とは異なる集団間比較場面でも同様の結果が得られるのか、検討の必要がある。

3つ目は、対象が中学生に限られていることである。例えば小学生は、すべての授業を学級担任が担当するため、中学生や高校生と比較して学級の果たす役割が大きいとされている（江村・大久保, 2012）。また、普通科の進学校などでは高校生になると文理選択があり、学級の持つ特色が変化すると考えられる。このように、各年代によって学級集団が持つ機能は異なっていると考えられるため、今回の結果を学級集団全体に一般化することはできない。他の年代において同様の検討を行い、学級集団の機能についてより詳細に見ていく必要がある。

以上のような課題は残されているものの、本研究は学級集団における好ましくない人物に対する感情を探索的に検討し、学級集団内で生じる黒い羊効果を間接的に確認することができた点において意義があると考えられる。

### 引用文献

- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bandura, A. (1995). Exercise of personal and collective efficacy in changing societies. In A. Bandura (Ed.), *Self-efficacy in changing societies* (pp. 1-45) New York: Cambridge University Press.
- Branscombe, N. R., Wann, D. L., Noel, J. G., & Goleman, J. (1993). In-group or out-group extremity: Importance of threatened social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 381-388.
- Buunk, B. P., Nauta, A., & Molleman, E. (2005). In search of the true group animal: The effects of affiliation orientation and social comparison orientation upon group satisfaction. *European Journal of Personality*, 19, 69-81.
- 江村早紀・大久保智生 (2012). 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討 発達心理学研究, 23, 241-251.
- 遠藤寛子・湯川進太郎 (2013). 対人的ネガティブ感情経験の開示と非開示者の反応—女子大学生を対象に— 心理学研究, 84, 1-9.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- 淵上克義・今井奈緒・西山久子・鎌田雅史 (2006). 集団効力感に関する理論的・実証的研究—文献展望、学級集団効力感、教師集団効力感作成の試み— 岡山大学教育学部研究集録, 131, 141-153.
- 藤本 学 (2011). 学級集団の人間関係の認知における教師と生徒の差異—CLASSの実践的活用に向けたケーススタディー— 久留米大学心理学研究, 10, 5-15.
- 濱口佳和・石川満佑育・三重野祥子 (2009). 中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連—2種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連— 教育心理学研究, 57, 393-406.
- 長谷川真里 (2014). 他者の多様性への寛容—児童と青年における集団からの排除についての判断— 教育心理学研究, 62, 13-23.
- 本郷由紀子 (2005). 中学生における学級の集団効力感尺度の作成と自己効力感および学校適応感の関連について 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 8, 63-72.
- 池上知子 (2014). 差別・偏見研究の変遷と新たな展開—悲観論から楽観論へ— 教育心理学年報, 53, 133-146.
- 石川満佑育・濱口佳和 (2007). 中学生・高校生におけるゆるし傾向性と外在化問題・内在化問題との関連の検討 教育心理学研究, 55, 526-537.

- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長 然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連. *発達心理学研究*, 20, 125-133.
- 狩野素朗・田崎敏昭 (1990). 学級集団理解の社会心理学. ナカニシヤ出版
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 297-307.
- 黒川光流・古川久敬 (2000). 学級集団における対人葛藤に関する研究の概括と展望. *九州大学心理学研究*, 1, 51-66.
- Marques, J. M., & Yzerbyt, V. Y. (1988). The black sheep effect: Judgmental extremity towards ingroup members in inter- and intra-group situations. *European Journal of Social Psychology*, 18, 287-292.
- Marques, J. M., Yzerbyt, V. Y., & Leyens, J. P. (1988). The 'black sheep effect': Extremity of judgments towards ingroup members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, 18, 1-16.
- 中島健一郎・浦 光博・甲斐晶子 (2010). 子どもの発達過程における集団への所属意識の機能に関する一考察: 所属クラスへの同一視の違いが社会的排斥に伴うクラスメイトと心理的紐帯の維持・強化に及ぼす影響. *長崎女子短期大学紀要*, 34, 94-98.
- 西野泰代 (2007). 学級での疎外感と教師の態度が情緒的な問題行動に及ぼす影響と自己価値の役割. *発達心理学研究*, 18, 216-226.
- 大西綾子・吉田俊和 (2010). いじめの個人内生起メカニズム—集団規範の影響に着目して—. *実験社会心理学研究*, 49, 111-121.
- 大対香奈子・大竹恵子・松見淳子 (2007). 学校適応アセスメントのための三水準モデル構築の試み. *教育心理学研究*, 55, 135-151.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討. *筑波大学発達臨床心理学研究*, 12, 65-71.
- 桜井茂男・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・萩原俊彦・鈴木みゆき…及川千都子 (2011). 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動. *攻撃行動との関係*. *心理学研究*, 82, 123-131.
- 坂本 剛 (1999). 中学生の学級集団における同調行動と適応についての一研究. *名古屋大学教育学部紀要*, 46, 205-216.
- 杉浦 幸・田中純夫・山田泰行 (2007). 中学生の反応的攻撃の変動要因—認知・感情・経験の側面からの理解—. *順天堂大学スポーツ健康科学研究*, 11, 21-30.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.
- 高田利武 (2011). 新版: 他者と比べる自分—社会的比較の心理学—. サイエンス社
- 竹村和久・高木 修 (1988). “いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性—. *教育心理学研究*, 36, 57-62.
- 外山美樹 (2002). 社会的比較志向性と心理的特性との関連—社会的比較志向性尺度を作成して—. *筑波大学心理学研究*, 24, 237-244.
- 吉岡和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感. *青年心理学研究*, 13, 13-30.
- 有倉巴幸・乾 丈太 (2007). 児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究. *鹿児島大学教育学部研究紀要*. *教育科学編*, 58, 101-107.

(受稿3月31日: 受理4月26日)